アレクサンダー・カップとアンドラゴジー

谷　和明

1　アンドラゴジー理論の開拓者ノールズと概念提唱者カップ

現代におけるアンドラゴジー（andoragogy）概念の受容に決定的な役割を果たしたのは、いうまでもなく米国のノールズ（Malcom S. Knowles）である。とはいえ、この概念自体は彼が考案したものではなく、既にドイツ語圏の成人教育界で使用されていたAndoragogik の借用、英訳であった。その事情をノールズは 1989 年に以下のように回想している。

> 1960 年代中期までには、私の心中では成人学習の理論枠組みの概要が構想されていた。そして 67 年に一挙にすべてに片が付くような経験をした。ボストン大学で私が指導した夏期講習会にユーゴスラビアの成人教育者ドゥシャン・サヴィチェヴィチ（Dusan Savisevic）という参加者がいたのだが、講習会の終了後、私のところにやってきて目を輝かせながら言った。「マルコムさん、あなたが提唱し、実践していることはアンドラゴジーです」。
>
> 「何ゴジ―だって？」と私は答えた。というのも、それは全く聞き覚えのない言葉だったからだ。
>
> サヴィチェヴィチはこの用語について説明してくれた。アンドラゴジーという語を初めて造語したのはアレクサンダー・カップというドイツのギムナジウム教師で、1833 年、学術誌の論文において、担当する夜間学級の成人学生への対応が昼間学級の未成年生徒に対するのといかに異なるかを説明しつつこの語を用いた。その後この語は忘却され、1921 年にドイツの社会科学者オイゲン・ローゼンシュトックが再導入したが、一般的な認知を受けることはなかった。1957 年にドイツの教授フランツ・ペゲラーが『アンドラゴジー入門―成人教育の基本問題』という著作を刊行するにおよび、ようやくドイツ、オーストリア、オランダ、ユーゴスラビアの成人教育家がこの語に着目するようになり、彼らの著作を通じて流布していった（偶然であるが、エドアルド・リンデマンはアンドラゴジー概念と結びつけてヨーロッパに紹介され、そのため 1926 年、27 年に発表された労働者教育に関する 2 つの論文でこの語が使用されている。けれども、それ以外のどのアメリカ刊行物でも使用されなかった）。[1]

ノールズはこのドイツ由来の概念が自分の構想を表すのにぴったりだと考え、翌 68 年の論文で「ペダゴジーではない、アンドロゴジー（androgogy）だ」と宣言した。その後、彼は「アンドロゴジー」という表現が造語的に誤りであることを知り「アンドラゴジー」に訂正し、1970 年に主著『成人教育の現代的実践―ペダゴジー対アンドラゴジー』を出版した。そこでも、アンドラゴジーのルーツが andragogik であることが示されている。そし

[1] Knowles, M. S.; The Making of an Adult Educator. San Francisco: Jossey-Bass.1989, p. 79

てアンドラゴジー概念の普及と共にその提唱者カップの名も知られるようになった。

とはいえ、ノールズによるカップの紹介は不正確、というより誤りを含んでいる。1833年に学術誌の論文で夜間学級での成人教育実践を踏まえてアンドラゴジーを提起しているという箇所は、実に興味深いが、根拠のない記述である。カップがアンドラゴジー（Andragogik）を最初に提起した著作『プラトンの教育論』は、学術誌掲載論文でなく500頁近い大著であり、内容も教育実践の理論化というよりプラトンからの引用を基にした思弁的なものである。ここからノールズがカップの名を伝聞的に挙げているだけで、その著作を読もうといった関心を抱かなかったことも明らかになる。自分の理論の独創性を確信していたからだろう。ノールズ以後も扱いは同様で、アンドラゴジー概念の提唱者であること以外には、議論の内容はもとより生年や経歴についても関心が払われてこなかった。

2　アレクサンダー・カップとその兄弟たち

アレクサンダー・カップに関して筆者がこれまでに確認できた事実は以下のものである。

1）1833年に公刊された『プラトンの教育論』でアンドラゴジー（Andragogik）概念を提起している。

2）その時点でゾースト市のギムナジウムの主席教師（教授）であり、少なくとも1848年までは在職していた。（下記の著作での著者肩書きから確認）

3）1821年から48年までの間に、上記を含め計8冊の教育分野での著作[2]を刊行している。

4）長兄フリードリッヒと末弟エルンストに関しては、ウィキペディア等で経歴がある程度わかる。エルンストは地理学、技術史分野の研究で、フリードリヒは教育者として紹介されている。

5）1848年革命後おそらく50年代に国外に移住した。その後の経歴は不明。

そこで、2人の兄弟および従兄（弟）であるクリスチアンの略歴を基にして、そこからアレクサンダーの略歴を推測してみよう。

---

[2] ①Commentatio historico-paedagogica de Platonis Legibus, quas in reipublicae libris de educatione tulit.　1821

②Commentatio historico-paedagogica de Platonis re gymnastica.　1828

③Commentatio de historia educationis et per nostram aetatem culta et in posterum colenda.　1834

⑤Aristoteles' Staatspädagogik als Erziehungslehre für den Staat und die Einzelnen. 1837

⑥Einleitung der Gymnasialpädagogik.1841

⑦Fragmente aus einer neuen Bearbeitung der Gymnasial-Pädagogik: mitgetheilt zur wissenschaftlichen Verständigung bei der bevorstehenden Reorganisation des gesammten und insbesondere des Gymnasial-Schulwesens.　1848

⑧Anleitung zur deutschen Redekunst.　1848

彼ら兄弟の父親は Johann C.W. KAPP といい、バイエルン州上フランケン地方の山間の田舎町ルートビッヒシュタット（バイロイト市のさらに北）の司法官であった。12 人の子供がいたが、末弟エルンストが 6 歳の時に死亡した。母親も早く没したので、年少の子供たちは親戚・知人の庇護の下で生育した。

長男のフリードリヒ（Friedrich Christian Georg Kapp：1792-1866）はバイロイトのギムナジウムで学んだ後、1810 年からエアランゲン大学で神学と哲学を学び 13 年に博士学位を取得し、半年間ハイデルベルク大学で学んだあと再度エアランゲンに戻り教授資格を取得した。ペスタロッチに心酔し、ヴュルツブルクで教育施設を設立したが、経営的に立ち行かなかった。19 年にはボン大学で私講師となり、教育学の教授となることを目指したがそれも断念し、21 年 Hamm 市にある王立ギムナジウムの上席教員となり、24 年からは校長を務めた。1848 年の革命運動には積極的に関与し、ヴェストファーレン州の全教員集会を開催し、その代表としてベルリンのプロイセン国会の教育委員会に招聘され、「教会と国家からの分離、無償学校教育、共同授業」という教育改革の推進に尽力した。[3]

フリードリヒの長男もフリードリヒ（Friedrich Kapp 1824 -1884 in Berlin)というというが、このフリードリッヒは学生時代にフォイエルバッハの宗教批判の影響をうけヘーゲル左派、社会主義的なジャーナリストとなり、1848 年革命期には後述の叔父クリスチアンの陣営に加担、革命敗北後はベルギーなどの亡命生活を経て後述のエルンストの移住したアメリカに移住している。大学卒業後革命までの一時期（1845～48)、彼は郷里の Hamm に帰り、そこで読書サークルを結成しプロイセン当局の検閲をかいくぐりながらヘーゲル左派や社会主義の文献を読んだという。また、彼を介して父親のフリードリヒもフォイエルバッハと交際している。

末弟であるエルンスト（Ernst Christian Kapp：1808-1896）は 16～20 歳にかけボン大学で古典文献学を学んだ後 1828 年に兄が校長を務めるハム市ギムナジウムに職を得た。30 年には歴史学の学位を取得し、以後 49 年までミンデン市のギムナジウムで歴史・地理の教員として働いた。彼が著した歴史・地理教案（これにはアレクサンダーも協力している）は模範的なものとして 1870 年まで再版されたという。エルンストは次第に民主主義的・連邦主義的な立場からプロイセンの専制制度を批判するようになり、当局から危険視されるようになった。1848 年革命流産後当局の迫害が身に及ぶことを恐れたエルンストは 49 年アメリカに移民した。アメリカでは農業で生計を立てつつ、進歩的なドイツ人結社「自由人協会」の会長やドイツ語新聞の発行などの活動を行っている。65 年に帰国し、デュッセルドルフに居住して大学私講師を勤めながら研究活動に余生を過ごした。[4]

---

[3] 以上は http://de.wikipedia.org/wiki/Friedrich_Christian_Georg_Kapp による。
[4] 以上は http://de.wikipedia.org/wiki/Ernst_Kapp および

兄弟の従兄（弟）で、アレクサンダーと最も年齢が近いと思われるクリスチアン（Johann Georg Christian Kapp1798-1874）についても触れておく。クリスチアンはバイロイトで生まれ、エアランゲン大学、ベルリン大学で神学と哲学を学び、1819 年に博士学位を取得し、24 年にはエアランゲン大学の哲学教授となった。けれどもその民主主義的政治思想のゆえに 32 年には休職させられ、39 年にはバイエルン王国から公職追放処分を受けた。すでに 32 年から隣国バーデン公国のハイデルベルクに居を移していた彼は、ハイデルベルク大学での教授職をめざした。けれども、1840 年にバーデン国宮廷顧問官に任じられ、以後政治家として活躍する。48 年革命期にはフランクフルト国民議会の代議員として左派グループ年に属してアメリカをモデルとした人民主権の民主主義国家樹立を主張した。[5]

以上を参照しつつアレクサンダー・カップの略歴を推測してみよう。

長兄の誕生が 1782 年、末弟の誕生が 1807 年だから、誕生年はその間である。出生地は兄弟と同じルートヴィヒスシュタットだろう。1821 年に刊行したラテン語著作での肩書が既に「哲学博士」であるから、それ以前に学位を取得していることになる。他の 3 人の学位取得年齢は 20～22 歳だから、彼も同様だとすると 1800 年頃に生誕し、10 代後半に大学で学び、20 歳ごろプラトンの哲学研究で学位を取得したと考えられる。年齢的には兄と弟のちょうど中間で、従兄であるクリスチアンより 1～2 歳若かっただろう。父親の死亡は大学入学の前後であったことになる。だとすれば、なるべく早く経済的に自立することを目指したはずで、ギムナジウムに就職したのも兄のように 20 代後半ではなく、学位取得後間もなくだったろう。だとすれば『プラトンの教育論』を著した 33 年には既に 10 年ほど教師経験を積んでいたことになる。

両親が早世したにもかかわらず 3 人の兄弟が大学で学んでいるのだから、Kapp の家族、一族はそれなりに裕福であり、かつ知的、学問的な人生を尊重する典型的な「教養市民層」に属していたのであろう。3 人共に優秀で、若くして学位や教授資格を取得したが全てギムナジウム教員となっている。この背景には、経済的自立を急ぐ必要があったことがあるだろう。と同時に、長兄フリードリヒの影響で教育という仕事に関心を抱いたと考えられる。

彼は大学教授をめざし、私講師となったにもかかわらず、断念してギムナジウムに就職している。父亡き後の一家の柱石として、弟妹たちの養育に責任を負う立場に置かれたからだろう。末弟エルンストの学業の面倒は彼が見たとされている。とはいえ、ただ生活の糧としての選択ではないだろう。ペスタロッチに心酔し、自ら教育施設を設立し、教育学研究を志したフリードリヒにとってギムナジウム校長の地位は、自己の教育理想を実現する機会であったろう。彼は、教育者としての自己の進路に誇りを持ち、それを弟たちにも

---

http://members.home.nl/fsimon/index.html による。

[5] 以上は http://de.wikipedia.org/wiki/Christian_Kapp による。

勧め、また自己の立場を利用して就職の援助もしただろう。そして、兄の献身を感謝し、尊敬していた弟たちは、その助言に従って進路を選んだ。

アレクサンダーの場合は、学位論文のテーマからも教育への関心は明白である。また彼の著作の献辞には長兄フリードリヒへの感謝が述べられているものが複数あり、他方弟エルンストと共同で著作を執筆してもいる。3 人の兄弟の関係は強かったと思われる。ギムナジウム教育に関する情報交換や議論も行われていたに違いない。当時はプロイセンのギムナジウム改革が進められた時期である。そこでは制度的問題と共に、教育とは何かという問題も問われた。それぞれのギムナジウムで責任ある立場にあった 3 兄弟である。教育論、教育哲学についての議論が白熱化することもあったろう。そのような議論を通じて、Andragogik という概念が浮上してきたのだと推測される。

アレクサンダーの兄弟たちに共通するのは 1848 年革命への共鳴・関与である。彼の周辺に教会支配や世襲的身分秩序を否定する民主主義的、社会主義的思想が支配的であったことは間違いない。

三月革命前期の政治文学の潮流に属する詩人・翻訳家フェルディナント・フライリヒラート Hermann Ferdinand Freiligrath (1810-76) は、リスト作曲のポピュラーな小歌曲《愛の夢第 3 番》の詞の作者としても知られるが、革命期にはマルクスと共に「新ライン新聞」編集に従事した「革命家」である。彼はその自伝で 1820 年代後半から 30 年代の青年期にアレクサンダーおよびエルンストと家族ぐるみの親交を結び、それが革命後の亡命時代を経て帰国した 60 年代になっても継続したことを回想しつつ、以下のように述べている

「アレクサンダー・カップとエルンスト・カップの両名とも 48 年の運動に直接加担したわけではなかった。とはいえ二人が余りにも率直かつ決然と自らの見解を公表したことは、その地位に影響を及ぼさざるを得なかった。自分達の行動、意見表明への非難、周囲との軋轢、無理解の包囲網が狭まる中で、二人は職を辞した。エルンスト教授は 49 年には家族を連れてテキサスに移民した。アレクサンダーは 50 年代の初めまで決断を延した後、チューリッヒに移住した。」

Gisberte Freiligrath; Beiträge zur Biographie Ferdinand Freiligraths. Linden 1889 S.104, 118, 182ff

それと Andragogik がどのように関係しているかも興味深いところである。